

平成 27 年度 私学経営研修会 実施報告書

研究のねらい 「私学振興と教育の未来」 ～私立学校振興助成法 40 年 新時代の経営を探る～

教育界はグローバル化等社会の変化に翻弄され、高大接続改革、小中一貫教育校制度化、学習指導要領全面改訂、英語教育強化など数々の改革構想が比類なき速度で進められようとしている。その矢面に立つ私立中学校・高等学校は、少子化と公立学校の私学化、財政的制約の中で、生徒募集・経営面でより厳しい状況に置かれている。折しも憲法改正に係る議論では、政府・与党等関係者は私学助成に関連する第 89 条の見直しに言及している。

2015 年(平成 27 年)は、国の私学助成制度の根拠を定めた【私立学校振興助成法】成立から 40 年に当たる。同法制定へと動き出すきっかけとなったのは、1972 年(昭和 47 年)に山形県米沢市で実施された当研究所主催「全国私立中学高等学校理事長・校長研修会」での討論であった。

奇しくも同法が生まれて 40 年目の今年、私立学校の先達が幾多の苦難を乗り越えて結実させた同法発祥の地・山形県で当研修会が行われる。全国の私学人が、思いを新たにこの地に集い、私学振興史上画期的な措置となった同法の原点と法制定の精神を顧みると共に、私学助成制度の意義と今後のあり方を再考し、高等学校等就学支援金制度に続く私立義務教育学校生徒等への公的支援制度の実現を目指して結束を強め、教育環境・経営改善に向けて進むことが期待される。

今年度の研修会は「私学振興と教育の未来」を研究のねらいに、山形県を代表するレストランのオーナーシェフを迎えての講演、中央からの最新情勢報告、地方私学による報告、パネルに加えて、参加者が各校の現状と課題を共有し、打開策のヒントを求めてグループ討議形式で意見交換と懇談を行う。併せて、生徒一人ひとりを大切に育む山形県の伝統ある私立学校を視察する。

当研修会が、私学の自主性・独自性を担保するべく私学振興と教育を見つめ直し、子どもたちと私立学校、日本の明日へとつながる新たな時代の経営・教育方策を探る好機となれば幸いである。

会 期 平成 27 年 6 月 4 日(木)～5 日(金)の 2 日間

会 場 ホテルメトロポリタン山形 山形市香澄町 1-1-1

《学校視察》 山形学院高等学校 山形市香澄町 3-10-8

参加人数 166 名(募集 120 名)

参加対象 理事長、校長、副校長・教頭、事務長またはこれに準ずる管理職の方

基本日程

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
	30	30	30	45	30	15	15	45	15	45		30
6/4 (木)	受付	開会式	講演	基調講演	昼食	報告	中高連 山形県 日私教研	パネル・ ディスカッション			教育懇談会	
6/5 (金)		意見交換会				昼食	視察校へ	学校視察 山形学院高等学校 (山形市)				
		分科会 (グループ討議)			全体会	総括						

講師・報告者・指導員（順不同）

奥田政行（アル・ケッチャーノ オーナーシェフ）
 今井榮喜（山形県私学振興議員連盟 世話人代表）
 椎名憲次（山形県総務部学事文書課 課長）
 石原弘迪（学校法人明正学園 理事長）
 木内秀樹（東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長）
 野原明（文化学園大学杉並中学高等学校 名誉校長）
 鈴木康之（水戸女子高等学校 理事長・校長）
 九里廣志（九里学園高等学校 理事長・校長）
 平方邦行（工学院大学附属中学高等学校 校長）
 高橋博（学校法人聖パウロ学園 理事長）
 金野眞行（帝京八王子中学高等学校 校長特別顧問）
 須藤勉（東京学園高等学校 副校長）
 吉田晋（富士見丘中学高等学校理事長・校長）
 實吉幹夫（東京女子学園中学高等学校 理事長・校長）
 山中幸平（学校法人山中学園 理事長）
 中川武夫（蒲田女子高等学校 顧問）

専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

實吉幹夫（東京女子学園中学高等学校 理事長・校長）
 鈴木康之（水戸女子高等学校 理事長・校長）
 長塚篤夫（順天中学高等学校 校長）
 木内秀樹（東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長）
 石原弘迪（学校法人明正学園 理事長）
 梅村光久（学校法人梅村学園 松阪法人本部分室長）
 新田光之助（筑陽学園中学高等学校 理事長・高校長）
 野原明（文化学園大学杉並中学高等学校 名誉校長）
 真城義麿（学校法人真宗大谷学園 理事）
 川本芳久（一般財団法人日本私学教育研究所 事務局長代行）

日程・プログラム

◇ 6月4日（木）

《会場：ホテルメトロポリタン山形 4F 霞城A・C》

08:30～09:00	受付
09:00～09:30	開会式 ◆主催者代表挨拶 吉田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 ◆開催県代表挨拶 石原 弘迪 山形県私立中学高等学校協会会長 ◆来賓祝辞 吉村 美栄子 山形県知事 ◆来賓祝辞 市川 昭男 山形市長 ◆役員・専門委員紹介 正副理事長、私学経営・教育制度専門委員等 ◆研修会運営方針説明 實吉 幹夫 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員長
09:30～10:30	講演 ◆演題 「教育政策と私学振興」～私学助成制度を中心に～ ◆講師 吉田 晋 日本私立中学高等学校連合会会長／一般財団法人日本私学教育研究所理事長
10:30～12:15	基調講演 ◆演題 「食からはじまる地域づくり」 ◆講師 奥田 政行 アル・ケッチャーノ オーナーシェフ
12:15～13:00	昼食
13:00～13:45	報告Ⅰ ◆テーマ 「教育改革と私学振興への思い」～私立学校振興助成法制定の精神に立ち返って～ ◆報告者 實吉 幹夫 日本私立中学高等学校連合会教育制度委員長／一般財団法人日本私学教育研究所副理事長
13:45～14:15	報告Ⅱ ◆テーマ 「山形県の私学の現状と課題」 ◆報告者 椎名 憲次 山形県総務部学事文書課課長
14:15～14:45	報告Ⅲ ◆テーマ 「新たな時代の教育と教員の使命」 ◆報告者 中川 武夫 一般財団法人日本私学教育研究所所長

15:00～17:30	パネル・ディスカッション ◆テーマ 「私学振興と教育の未来」～私立学校振興助成法40年 新時代の経営を探る～ ◆パネリスト 今 井 榮 喜 山形県私学振興議員連盟世話人代表 石 原 弘 迪 学校法人明正学園理事長 木 内 秀 樹 東京成徳大学中学高等学校理事長・校長 野 原 明 教育ジャーナリスト ◆コーディネーター 鈴木 康 之 水戸女子高等学校理事長・校長
18:00～19:30	教育懇談会 《会場：ホテルメトロポリタン山形 4F 霞城A・C》 - 開 会 - 主催者挨拶 吉 田 晋 一般財団法人日本私学教育研究所理事長 - 来賓挨拶 遠 藤 利 明 衆議院議員 清 田 浩 史 山形県総務部長 - 来賓紹介 齋 藤 順 治 山形市総務部長 - 乾 杯 九 里 廣 志 山形県私立中学高等学校協会副会長 ～（懇談）～ - 次年度開催県代表挨拶 藤 澤 俊 樹 滋賀県私立中学高等学校連合会会長 - 閉会挨拶 山 中 幸 平 一般財団法人日本私学教育研究所副理事長

◇ 6 月 5 日（金）

《会場：ホテルメトロポリタン山形 3F 出羽A・B》

9:00～12:00	意見交換会（グループ討議～全体会） ◆テーマ 「私学振興と教育の未来」～新時代の経営を探る～ ◆総合進行役 真 城 義 麿 学校法人真宗大谷学園理事／一般財団法人日本私学教育研究所教育制度客員研究員 ◆世話役 實 吉 幹 夫 私学経営専門委員長 鈴木 康 之 私学経営副専門委員長 長 塚 篤 夫 教育制度専門委員長 木 内 秀 樹 私学経営専門委員 石 原 弘 迪 私学経営臨時委員 梅 村 光 久 教育制度専門委員 新 田 光之助 教育制度専門委員 野 原 明 教育制度客員研究員 真 城 義 麿 教育制度客員研究員 山 中 幸 平 副理事長 九 里 廣 志 九里学園高等学校理事長・校長 平 方 邦 行 工学院大学附属中学高等学校校長 高 橋 博 学校法人聖パウロ学園理事長 金 野 眞 行 帝京八王子中学高等学校校長特別顧問 須 藤 勉 東京学園高等学校副校長 中 川 武 夫 所 長 - グループ討議（分科会） 【重点テーマ】①私学振興と経営／②新時代の教育と経営（グローバル人材育成、高大接続改革等） ③教職員と組織の活性化／④私学の課題（生徒募集、特色教育、危機管理等） - 全体会 ☆ 分科会報告(20分) … 分科会の各グループ世話役による報告 ☆ 意見交換会(10分) … 分科会報告・研修会全体を受けて参加者による意見交換
12:00～12:15	総 括 實 吉 幹 夫 一般財団法人日本私学教育研究所私学経営専門委員長
12:15～13:15	昼 食
13:15～15:00	学校視察 山形学院高等学校（共学校）〈山形市香澄町3-10-8〉 （総合普通科・情報創造科・食物調理科） ◆歓迎挨拶・学校概要説明 北垣俊一 理事長・校長 ◆校舎・授業（調理実習）見学、生徒活動紹介、学校関係者との意見交換 等

◆ 概 要 ◆

平成 27 年 6 月 4 日(木)・5 日(金)の 2 日間、ホテルメトロポリタン山形(山形県山形市)において、「平成 27 年度全国私立中学高等学校 私学経営研修会」が「『私学振興と教育の未来』～私立学校振興助成法 40 年 新時代の経営を探る～」をテーマとして、参加者 166 名を得て開催された。

平成 27 年は、国の私学助成制度の根拠を定めた「私立学校振興助成法」成立から 40 年に当たる。この法律制定へ動き出すきっかけとなったのは、昭和 47 年に山形県米沢市で実施された当研究所主催の全国私立中学高等学校理事長・校長研修会での討論であった。同法が生まれて 40 年目に同法の発祥の地とも言える山形県において、今回の研修会が行われ、全国各地から多くの私学人が参集し、私立学校振興助成法の原点と精神を顧みて、私学助成制度の意義と今後のあり方について考えていく好機となった。



初日の開会式では、吉田晋・当研究所理事長による開会挨拶、開催県を代表して山形県私立中学高等学校協会の石原弘迪会長による歓迎挨拶に続き、来賓の吉村美栄子・山形県知事、市川昭男・山形市長から祝辞が述べられた。開会式に続いて、吉田晋・日本私立中学高等学校連合会(以下、「中高連」)会長／当研究所理事長による講演「教育政策と私学振興」、山形県を代表する全国でも予約が取れないことで有名なイタリアンレストラン「アル・ケッチャーノ」オーナーシェフの奥田政行氏による基調講演「食からはじまる地域づくり」が行われた。午後からは、中央からの最新情勢報告として實吉幹夫・中高連教育制度委員長／当研究所副理事長、地方私学からの報告として椎名憲次・山形県総務部学事文書課課長、当研究所からの報告として中川武夫所長の 3 名による報告、引き続き「私学振興と教育の未来」をテーマとしてパネル・ディスカッションが行われた。パネル・ディスカッションのパネリストとして、山形県私学振興議員連盟世話人代表の今井榮喜氏を迎え、山形県の私学を代表して学校法人明正学園理事長の石原弘迪氏、東京の私学を代表して東京成徳大学中学高等学校理事長・校長の木内秀樹氏、教育ジャーナリストの野原明氏が加わり、活発な議論が展開された。夕刻からの教育懇談会においては、私学に理解の深い山形県選出の遠藤利明・衆議院議員が東京から来臨され、祝辞を述べられた。山形県および山形市関係者も臨席された。

2 日目は、午前中は参加の先生方が、「私学振興と経営」、「新時代の教育と経営(グローバル人材育成、高大接続改革等)」、「教職員と組織の活性化」、「私学の課題(生徒募集、特色教育、危機管理等)」を重点テーマに、10 グループに分かれて討議が行われ、全体会報告で意見・情報を共有した。午後からは会場を山形学院高等学校(山形市)に移動し、同校の学校視察を行った。

実施概要は、以下のとおりである。

◆ 開会式 ◆

開会式は、吉田晋理事長、石原弘迪・山形県私立中学高等学校協会会長の挨拶から始まった。吉田理事長は挨拶の中で、私立学校はこの 40 年にわたり私立学校振興助成法には大きく助けられてきたが、40 年経って、現在の私学振興が適切なものであるのか?と問題を提起し、参加の先生方に更なる振興充実に向けて協力を要請した。石原県協会長は参加者に歓迎の言葉を述べ、吉村美栄子・山形県知事並びに市川昭男・山形市長に向けて、山形県私学に対する理解と援助に感謝の意を表し、2 日間の研修会が実のある研修会となるように願っていると挨拶した。

来賓の吉村県知事は、私立学校振興助成法の制定から 40 年という節目の年に、その制定の引き金となった研修会での議論が行われた山形県で、ふたたびその研修会が開催されることは喜ばしく、私学教育の発展に供されることを期待すると祝意を表した。市川市長からは、山形市の私立学校が社会に輩出した幾多の人材が山形市はもとより全国にて多岐に渡る分野で活躍し、質・量両面において十分な役割を果たしており、山形市としてもその教育の充実のための支援を行っている。今回の研修会が実りあるものとなるように期待していると挨拶された。





当研修会の役員・専門委員・客員研究員紹介の後、實吉幹夫・私学経営専門委員長が研修会の運営方針を述べた。實吉専門委員長は其中で、当研修会は昨年沖縄県で開催された研修会、同年10月の全国私学教育研究集会東京大会へとつながっているもので、今回の主旨は、私立学校振興助成法が成立してからその運用面で危惧される面もあることから、これからの同法がどうあるべきかを再考することを目的の一つとしていると説明した。

◆ 講演 I ◆

「教育政策と私学振興」～私学助成制度を中心に～

吉田

晋 日本私立中学高等学校連合会 会長／一般財団法人日本私学教育研究所 理事長



テーマは三つに大別される。はじめに、喫緊の課題として、18歳選挙権の問題については、少年法、主権者教育、高校生の政治活動等についての経緯や私立高校の立場からの見解が述べられ、問題が提起された。次に、高大接続、大学入学者選抜の問題に関して、現在の大学入試と、文部科学省が現在検討している二つの新テスト、さらには次期学習指導要領について、文部科学省の動向を中心にその問題点を解説した。大学入試では英語の外部試験活用、次期学習指導要領ではアクティブ・ラーニング、ICT活用に伴う費用等の問題等を指摘した。第三に、教育再生実行会議第八次提言は、教育費の負担軽減による少子化対策と経済の好循環の創生を目指すもので、日本にとっての喫緊の課題とされており、教育の活性化につながるものの、主な内容は「当面幼児教育の質の向上・無償化と、高等教育段階の教育費負担軽減を優先」するというもので、小中高校の政策が抜け落ちていっていると問題を提起した。この点に関しては、特に中学校について、専門学校やフリースクール等にも補助金の話が出ている中で、私立中学校については公的な援助がほとんどないのは由々しき事態であると指摘し、今後は私立中学校の公的支援制度の実現を目指していきたいと決意を語った。

最後に、私学という一つの枠の中で、私学全体が切磋琢磨して、私学に入学を希望する子供を増やすことができるように、互いに協力して進んでいきたいと総括した。

◆ 基調講演 ◆

「食からはじまる地域づくり」

奥田政行 アルケッチャーノ オーナーシェフ



自分のその後の人生を左右した次の出来事があった。高校時代、バドミントン部に入部し、全国大会予選であと1点というところで、プレッシャーで逆転負けをした。その後は退学寸前まで落ちこぼれていった。その時に学んだのは、優等生と劣等生というのは紙一重だということであった。そして、学校を卒業する時に、社会人になったら劣等生ではなくて優等生になろう、社会人になったら、来たチャンスは必ずものにしようと思い、今までやってくることができた。

実家がドライブイン（レストラン）を経営していた時に、鶴岡市の方々に助けていただいたことがあって、鶴岡（庄内）に恩返しをしたいと思い、庄内を「食の都」にしたいと考えたのである。

山形県でアルケッチャーノを開店した時に地産地消を目指したが、地元の野菜は農協を通してほとんどが東京に送られるという現状であった。最初は自分で畑を作ろうとしたが、日々のお仕事で終わってしまう。そのため、地元の生産者との協力を考えることにした。生産者により得意な野菜があり、その方々の適地適作を揃えればおいしい野菜が揃う。しかし購入しようとする農協を通さなければならぬと断られたので、例えば、野菜とワインを交換するといった物々交換をしたいと言うと応じてくれた。野菜は東京に出荷するために生産するのか、地元のために生産するのかで味が変わってくる。地元向けに生産することで味が良くなり、結果的に値段が上がり、生産量が増えていく。

料理を素材（野菜等）から考えることで、風景を料理できるようになる。しかし、素材を知り尽くすことは困難なので、野菜が育つ環境を勉強しようと考えた。水・土・風・太陽が野菜にどのような影響を与えるのかを勉強することで、土地によって生産物の味が違うことが分かる。その中で自分の役割は大地の翻訳者でそれを人に伝えていくことであると考えた。料理は自分の気持ちを形にできる。食材に関わる命、生産者の思いを表現する。自分の気持ちの変化で料理が変化する。

山形県に無登録農業問題事件が起こり、風評被害が出た際は、山形県への恩返しのため、「食の都庄内がある山形県」にしよう

と考えた。全国紙の「四季の味」や「クロワッサン」に食に関する事柄を連載したりして、必死で頑張ったが、スタッフがプレッシャーでやめていった。そこで、プレッシャーは感じるのではなく楽しもうと、笑うようにした。

朝のテレビ番組に出演することになり、番組の中で料理を作ることになった。ここはチャンスと思い、相手をメインの司会者に絞り料理を作って、司会者に「山形県の食材はおいしいね」と言っていただき、ここで無登録農薬問題は終わりを告げたと感じた。

「食の都庄内」が完成まであとわずかという時に、3.11 東日本大震災が起きた。特に放射能問題について、日本は危機的状況と考え、山形の無登録農薬問題を良い方向にしていっていった経験で日本を何とかしたいと考えた。

岩手に炊き出しに行った。庄内での自分の経験をもとに、考えがまとまってから行動しようと考えていたが、現実を知り、各被災地でその時に自分は何ができるかを考えることが必要と感じた。庄内から生産者にいただいた食材を運び、被災地の方々がその時に食べたいものを作った。

ただ炊き出しをするだけでは支援にならないと考え、被災地の生産者が自立できる仕組みを考え、瓦礫の撤去作業だけを行っていた漁業者の方に、「天ぷら職人を連れてきて、牡蠣の天井を作るから、牡蠣を採っておいて下さい」と言う。すると漁業者の方々は牡蠣を採ってしてくれた。第一歩を踏み出すために食べ物は大変有効な手段である。

福島では郡山にレストランをオープンさせた。福島で生まれ育ち料理人を目指す子ども達が料理を作るという構想のレストランで、福島で生まれ育った子どもの中から福島の未来を作っていく、福島の食材を日本にPR してほしいと考えている。

震災前、日本は食べ物で一つになっていた。未来の料理人や生産者のためにも、また一つになりたいと考え、スペインのサン・セバスチャンで行われた世界料理学会に出展し、日本の食材の安全を訴えた。世界の三ツ星レストランのシェフ達が集まって応援してくれたこともあり、140 あるブースの中で一番人が集まった。

その後、スペインの日本大使館でスペインのフードジャーナリストに料理を作ることになった。その時の総料理長がフランス料理のシェフであったが、和食の職人に「料理は自分で全部やる」と言って料理をさせないようにした。腹が立って、料理台を占拠し、全部自分の料理を並べた。するとスペインの国営放送がすべて自分のところに来てしまった。その結果、スイスで行われたダボス会議の料理長に抜擢される。日本の食の未来に小さな光が見えてきた。スペインのフードジャーナリストに始まり、だんだん日本の食を応援してくれる方々が増えてきた。ローマ法王やダライ・ラマ氏にも食材を持って行った。ローマ法王には諸事情で食べて頂けなかったが、ダライ・ラマ氏には食べて頂き、「Very Good」と言って貰えた。

これらのことは、高校時代のあと1点で勝利を逃したことに起因している。勝負の時は必ずあの「1点」の状況に戻るようになっている、どんなVIP相手でも怖じけずチャンスをものにしようということである。

若い人達には、「料理人は外から見ると小さな職業である。しかし、誇りを持ち、日本のために出ていくと、何かができる。これからの日本を作る子ども達は一人ひとりが、日本の未来をイメージし、そのイメージのために何をするのかを考え、多くの仲間を増やし、ともに喜びあえる素晴らしい日本を作っていこう」と話している。そして大切にしていることは、「誰も犠牲にせず、互いに育み合いながら、関わった人すべてを幸せにする」、そしてもう一つ、「誰にも染まらず、誰にも惑わされず、自分が正しいと感じたことを正しいと思ってやる中で、日々起こることは宇宙の営みからすればほんの小さなこと、でもそこに喜びが生まれれば、それは何にも替え難いほど大きなものだ。日本のためにと思ったことを惑わされずに行きなさい。」ということであった。

レストランには約30人の調理スタッフがいるが、そのスタッフに教えているのは、「自分の階段で今どこにいるか考えなさい」、「将来必ず日本のために役立つような人間にならなさい」、このようにして人間は成長していくということである。一人のスタッフに対し、「見てくれる人」、「聞いてくれる人」、「言ってくれる人」という3人を周りに置いておくことと辞めなくなる。また、技術面では、イタリア料理、フランス料理全体系図があり、これは料理の本にはない。これを覚えるとスタッフはすぐやめてしまう。従って料理界では出さない。しかし、それを全部図にして毎日勉強させ、覚えた技術に印をつけさせている。このことで、例えばイタリア料理は何%くらいのことを覚えていると分かる。このようにすると、離職率が格段に減る。

最近の若い子はなぜ悪いことをするのか。アルバイト等の形が多くなり、自分の仕事に誇りを持ってない。夢と誇りを持ってない男性は女性から見ると男らしくない。スタッフには自分がコックであることに誇りを持ち、常に夢を語る人になるようにと言っている。女性には安定と日々の小さな幸せが大切だ。

人を好きになる。人を好きになると愛される。愛されると勇気が出る。そんな私は多くの人から愛されるように、料理界のドラえもんになりたい。『こんな料理作ってよ』とか言われたら、笑いながら、四次元ポケットから出す。それを出すことによって、実はのび太君は失敗しちゃう。『だからいったじゃない、のび太君』と言いながらも、実はドラえもんはのび太君を愛しているので、必ず助けに行く。そういう人になりたいと思っている。

◆ 報告Ⅰ ◆

「教育改革と私学振興への思い」～私立学校振興助成法制定の精神に立ち返って～

實 吉 幹 夫 日本私立中学高等学校連合会 教育制度委員長／一般財団法人日本私学教育研究所 副理事長

「教育改革と私立学校」、「私立学校振興助成法制定と『理事長・校長研修会』」、「私立学校振興助成法の意義と課題」、「私学振興への思いと教育の未来」の4つの柱立てで報告が行われた。

はじめに「教育改革と私立学校」では、「次期学習指導要領等」、「高大接続・大学入学者選抜改革」、「教員の資質能力の向上」の3つの動きをピックアップし、その経緯や今後の方向について言及。これらの動きを受けて、これからの教育に大事なことは、どのように心血を注ぎ、知恵を出していくかであって、制度等を変えるだけで何かが良くなることは決してなく、私立学校がどのような思いで学校を作ったかという原点をしっかりと見据えていくことが肝要である。

次に「私立学校振興助成法制定と『理事長・校長研修会』」、第三に「私立学校振興助成法の意義と課題」は、今回の最大のテーマである同法の成り立ちについて、契機となった昭和46年の鹿児島県、更には昭和47年の山形県で行われた当研究所「理事長・校長研修会」（現在の私学経営研修会）の記録を紐解いた。今次研修会を、同法制定に尽くされ、今日の私学助成の礎を築かれた国会議員やわれわれ私学の先達の思いと精神を理解し、未完と言われる同法の趣旨に立ち返って、私学助成制度の整備拡充、私立中学校への公的支援制度の実現に向けて、これからの私学振興の新たな運動を展開していく契機にすることが欠かせない。

最後に「私学振興への思いと教育の未来」として、私立学校振興助成法に込められた先達の思いを今のリーダーが記憶あるいは記録に残し、次世代のリーダーがそれを引き継ぎ、今後直面する幾多の困難に負けず、教育の未来を拓いていく私学人になることを期待していると締めくくった。



◆ 報告Ⅱ ◆

「山形県の私学の現状と課題」



椎 名 憲 次 山形県総務部学事文書課 課長

山形県の私学の現状として、学校数と生徒数の公私比率、また生徒数の公私比率と募集定員充足率の推移を見ると、私立高校の努力の成果が現れている。また山形県では私立高校の就職率は公立に比べて高く、県内就職率も高い。

山形県の私学助成については、私立学校は公教育の一翼を担っており、私学振興の充実強化に努めていることから、全日制における生徒1人当たりの単価は全国3位の高水準となっている。平成20年には全国35位だったが、補助率50%を目標とし、平成25年度に目標に達して、以後は維持している。また、保護者負担の公私間格差を是正するため、国の高等学校等就学支援金に上乗せを行う授業料軽減補助を行っており、特に低所得世帯には負担軽減を拡充している。しかしながら、山形県の私立学校の耐震化率は全国最下位で喫緊の課題となっているが、国庫補助の期限となる平成28年度に耐震工事を計画している学校が集中し、予算確保が困難なため、国に対し事業実施期間の延長を要望することを考えている。

山形県の最重要課題として人口の減少があげられており、人と地域が輝く「やまがた創生」の実現という総合戦略が策定されている。その中で、私学には、「子どもの多様な力を引き出す教育の推進」と「若者の県内定着の促進」を期待している。

私立学校は、それぞれの建学の精神に基づいた個性豊かな教育を積極的に展開している。今こそ、私学ならではの独自性を発揮し、長き伝統の中で培ってきた様々な知恵と工夫による時代を切り拓く教育の実践が、山形県の将来を担う人材を生み出し、若者の県内定着につながっていくことを大いに期待したい。

◆ 報告Ⅲ ◆

「新たな時代の教育と教員の使命」



中 川 武 夫 一般財団法人日本私学教育研究所 所長

新たな時代の教育と教員の使命をテーマに、主としてグローバル教育、学習・指導方法、大学入試改革の3つをとりあげたい。

グローバル教育については、政府はグローバル化対応として、英語教育の抜本的改革、理数教育の刷新、ICT教育を3本の矢としている。特に英語教育改革は最優先課題であり、大学入試でも英語4技能の評価が重要とされ、資格・検定試験の活用が促進されている。またグローバル教育について、与えられた条件の中で「どうにかする力」が重要である。これは、生徒が将来どのような社会でも生きていける力を育成することだ。語学力、コミュニケーション能力、情報処理能力など生き抜くアイテムを与えることが必要で、私立学校の得意な分野であると言える。

学習・指導方法については「アクティブ・ラーニング」の評価、また一斉学習・個別学習等との使い分け方が課題とされる。
 大学入試改革を巡る動きとして、大学入学希望者学力評価テスト(仮称)と高等学校基礎学力テスト(仮称)を利用した1点刻みではない評価の方向性、また合教科・科目型と総合型のテストについては、教員の対応力が問われてくる。
 今回のテーマに関連した研修会等が当研究所で行われているので、先生方及び所属校の教職員には是非参加を検討されたい。

◆ パネル・ディスカッション ◆

「私学振興と教育の未来」～私立学校振興助成法 40 年 新時代の経営を探る～

パネリスト 今井 榮喜 山形県私学振興議員連盟 世話人代表
 石原 弘迪 学校法人明正学園 理事長
 木内 秀樹 東京成徳大学中学高等学校 理事長・校長
 野原 明 教育ジャーナリスト
 コーディネーター 鈴木 康之 水戸女子高等学校 理事長・校長



☆鈴木氏（コーディネーター）

今回の私学経営研修会で、私立学校振興助成法の成り立ちの思いを受け止め、各私立学校が、理念と実践を持っていく契機にしてほしい。

第一に、改めて私立学校振興助成法の成り立ちについての思いを我々がしっかり受けとめる。次に、これからの私学振興を各先生方が、自分の問題として考える。第三に、それを受けて、私学教育の方向をしっかりと考える機会としていただきたい。

前半は「私学振興」について、後半は、「教育の未来」というテーマで進めていく。

《私学振興》

☆今井氏 私学振興を政治で進めている立場から話したい。山形県私学振興議員連盟は、全会派が同じ方向と目的を持って活動している。

☆石原氏 山形県の現状と私学助成の特徴として、幼稚園、中高、専修・各種学校、短期大学の4団体が力を合わせて行っている。

☆木内氏 私学の生徒減少について問題を提起した。東京の私学助成は、先達の努力で成り立っていて、議員の理解・協力を得るために、保護者を巻き込んで運動を行っている。

☆野原氏 私学助成については、憲法第89条違反という意見もあり、私立学校は公の支配に属しているのかという未解決の問題をしっかりと認識しておく必要がある。



各先生方の話を受け、パネリストの先生方が様々な議論を行った。フロアからは、近藤彰郎・東京私立中学高等学校協会会長、吉田晋・理事長、九里廣志・九里学園理事長、實吉私学経営専門委員長らが議論に加わり、私学助成に関わる成り立ちから現在の状況、今後のあり方について意見が交わされた。

《教育の未来》

☆今井氏 山形県の私立学校卒業生の地元定着率が高いので、私立学校には期待している。

☆石原氏 私学には様々な生徒がいて、その一人ひとりがその学校に入学し、卒業したことを良かったと思うってくれる教育を行うことが本来の私学の姿である。

☆木内氏 これから私学にとって厳しい時代が迫っているので、公立との差別化、他の私学との差別化を真剣に考えていかなければならない。

☆野原先生 これからの教育は、自分で問題を見つけ、解決し、表現できる人間を育てることだ。アクティブ・ラーニングはその内の一つに過ぎない。大学入試問題にも関連するが、子ども達に問題解決させるために教育がどういう発問をできるかということが大事だ。

◇参加者 ディスカッションを振り返り、今回のテーマは素晴らしく、有意義であった。

☆鈴木氏 私立学校振興助成法の成立時の先達の思いを思い出話だけにせず、継承し、私学の力をさらに高めていきたい。



◆ 教育懇談会 ◆



1 日目のプログラムの締めくくりとして、教育懇談会が行われた。

まず、吉田晋・理事長の挨拶が行われ、その後、来賓の遠藤利明・衆議院議員（山形県選出）、清田浩史・山形県総務部長が祝辞を述べた。

吉田理事長は挨拶で、遠藤議員の私学へのご支援、特に耐震化へのご支援について、感謝の言葉を伝えた。

遠藤先生は祝辞の中で、教育が多様化していく中、自分で考え、解決していく、アクティブ・ラーニング等の授業をどのように作り、どのように生き抜く力を身に付けさせるかが課題であり、そのために私学の特徴を活かしてほしい。大事なものは特徴ある人間を育てることで、それは建学の精神を持った私学の役割が大きいと述べた。清田山形県総務部長は、喫緊の課題として山形県内の私学の耐震化をあげた。今井榮喜・山形県私学振興議員連盟世話人代表、椎名憲次・山形県総務部学事文書課課長、齋藤順治・山形市総務部長が臨席された。

山形県私立中学高等学校協会副会長の九里廣志先生による乾杯の後、懇談がスタートした。この教育懇談会は、翌日の意見交換会と同じグループでテーブルを囲むことで、あらかじめ懇親を深め、意見交換を促進する形で行っている。

当研修会の次年度開催県を代表して滋賀県私立中学高等学校連合会会長の藤澤俊樹先生が挨拶され、山中幸平・当研究所副理事長からお礼と閉会の挨拶が行われ、閉会した。



◆ 意見交換会 ◆

真城義麿・教育制度客員研究員が総合進行役を務め、意見交換会が始まった。参加者は10グループに分かれ、BからEグループは「私学振興と経営」、FからIグループは「新時代の教育と経営（グローバル人材育成、高大接続改革、その他）」、JからLグループは「教職員と組織の活性化」、MからPグループは「私学の課題（生徒募集、特色教育、危機管理など）」の4つの重点テーマを中心に、2時間の討議を行った。当研究所専門委員・役員等がそれぞれのグループの世話役となり、進行を促した。





グループ討議終了後は、重点テーマ毎に代表1名が総括報告する形で全体会が行われた。

「教職員と組織の活性化」(新田光之助・教育制度専門委員)

評価の問題が信頼関係や活性化につながっていくという事例が出された。教職員と組織の活性化は非常に重要である。

「私学振興と経営」(平方邦行・理事)

私学助成を続けるためには、助成金の意味を理解し、運動を続けていくこと、現状のままではなく、発展させていくことが必要であり、未来を見据えてやっていかなければならない。

「新時代の教育と経営(グローバル人材育成、高大接続改革、その他)」(須藤勉・グローバル教育研究専門委員)

高大接続およびグローバル人材育成、ICT活用について意見交換が行われ、ICTでは学校間格差の問題、グローバル教育では、建学の精神をもとにしたグローバル人材の育成について話し合いが持たれた。

「私学の課題(生徒募集、特色教育、危機管理など)」(長塚篤夫・教育制度専門委員長)

生徒募集と特色教育は関連しているが、私学はそれぞれ特色があるのが当然で、特色よりも日々の実践が大切である。

真城総合進行役は、私学には私学ならではの揺るぎないものがあり、揺るぎないからこそ柔軟性、自由度があるとまとめた。

◆ 学校視察 ◆

山形学院高等学校

最後のプログラムとして、山形学院高等学校に会場を移し、学校視察が行われた。

まず、同校理事長・校長の北垣俊一先生から挨拶があり、その後、2班に分かれて、ハンドベル部の演奏、調理実習の見学と試食、校舎見学を行った。最後に實吉専門委員長から視察校へのお礼の言葉が述べられ、終了した。



◆ 総括 ◆ 實吉 幹夫 私学経営専門委員長



研修会の最後に、實吉専門委員長が研修会を総括した。

まず、研修会の目的の一つは、全国の先生方が問題を共有化していくことで、その意味で絆やつながりを作ってほしい。そして、当研究所、あるいは中高連としては、全国の私立学校の先生方にもどのように役に立てるかを最大のテーマとしているので、先生方のご意見を聞かせていただきたい。

次に、私学経営・私学助成について、私学を理解していただく方を多く集めると共に、助成金だけに頼るのではなく、私学は寄附行為で成り立っているものであるから、寄附をどのように増やしていくかということもこれからの課題になっていくのではないかと。

全国私学教育研究会長野大会・私学経営部会及び次年度に滋賀県で開催を予定している私学経営研修会についても、是非参加の検討をお願いしたい。

◆ 参加者アンケートより ◆ (回答 39 名/参加 166 名 回答率 21.7%)

☆参加目的

6項目の選択肢(自己研鑽・知見拡大、中央最新情報収集、新時代の経営・教育への対応、参加者情報交換・交流、他校参考事例・課題収集、所属校課題解決・改革・発展)から、殆どの項目が均一に選択され、様々な内容が幅広く求められている。

☆講演(吉田理事長)

喫緊の課題、とりわけ大学入試、高大接続改革についての課題・関心が多く寄せられた。

☆基調講演（奥田氏）

料理人が地域に貢献、とりわけ3.11東日本大震災の復興への取り組みへの内容が主となったが、地域の人々に自分達の力で復興させるという意識を待たせる取り組みが、教育で人を育てていくことにつながった。

☆報告Ⅰ（中高連）

私立学校振興助成法の歴史や先達の思いについての詳細な報告で、成立当時を知ることによって、同法の大切さを知り、今後のあり方についても考える契機になった。

☆報告Ⅱ（山形県）

地方私学の苦労や問題点についての事柄を聞き、自身の環境と照らし合わせて、考える内容となった。

☆報告Ⅲ（日私教研）

短い時間であったが、コンパクトな資料と説明で、大変分かりやすく、日私教研の事業の意味・重要性についての理解に役立つ報告となった。

☆パネル・ディスカッション

吉田理事長の講演や實吉委員長の報告を行った上で行われたが、その流れで、スムーズに進行された。

パネリストも議員、地方（山形県）私学経営者、東京私学経営者、第三者的（教育ジャーナリスト）の4つの異なる立場でそれぞれの思いや現状・課題が語られ、参考になった。

会場からの発言もあり、中央情勢はもとより、私立学校振興助成法の成り立ち、先達の思いや意義について理解が深まり、これからの私学振興を考える契機となるディスカッションになった。

☆教育懇談会

吉田会長の挨拶、遠藤利明衆議院議員の祝辞、清田山形県総務部長の祝辞に、それぞれ私学情勢の現状や私学に期待する内容が盛り込まれて、有意義なものであった。

懇談会のテーブルが翌日の意見交換会グループと同じとなっていることは、スムーズな意見交換につながった。

☆意見交換会

他校の情報の収集を中心にさまざまな内容で忌憚のない意見が交された。

☆学校視察

例年同様、視察参加の人数や参加者の視察に対する姿勢から、継続実施が望まれている。

☆来年以降の意見交換会希望テーマ

回答者に事務長等が多かったことから、とりわけ事務関係についての情報収集が寄せられた。

☆来年度以降の要望

喫緊の課題に関すること、私学振興に関する内容も望まれている。

◆ 都道府県別参加者数加者 ◆

北海道	6	神奈川	5	広島	3
青森	1	東京	35	香川	2
岩手	2	長野	2	福岡	4
宮城	3	岐阜	1	佐賀	1
山形	33	静岡	10	長崎	1
福島	4	愛知	7	大分	1
新潟	2	滋賀	3	宮崎	2
茨城	2	京都	5	鹿児島	1
栃木	4	大阪	9	沖縄	2
群馬	1	兵庫	3		
埼玉	3	鳥取	2		
千葉	4	岡山	2	合計 33 都道府県・166 名	

**次年度(平成28年度)私学経営研修会は
滋賀県大津市・大津プリンスホテル※
(※4月より新名称「びわ湖大津プリンスホテル」)において
平成28年6月2日(木)～3日(金)に開催いたします。**

2015(平成27年)6月5日・金
山形新聞 朝刊

時代に即した教育
私学経営者が理解
全国の私立中学校、高校
の関係者による私学経営研

県内外から約170人が参加
して開幕した私学経営研修会
山形市・ホテルメトロポリ
タン山形



修会が4日、山形市のホテルメトロポリタン山形で始まった。「私学振興と教育の未来」を研究テーマに、約170人の参加者が時代に即した教育の在り方について理解を深めている。5日まで。

日本私学教育研究所(吉田晋理理事長)が毎年、全国各地で開催している。今年
は国の私学助成制度の根拠

となる「私立学校振興助成法」が成立して40年の節目。同研究所によると、同法が誕生するきっかけとなったのが1972(昭和47)年に米沢市で開かれた私学経営研修会だという。本県での開催はこの時以来で、吉田理事長は開会式でこれらの経緯に触れ、「私たち私学人がさらに一つとなるような会にしたい」とあいさ

つ。開催地を代表して県私立中学高等学校協会の石原弘迪会長が歓迎の言葉、吉村美栄子知事らが祝辞を述べた。

引き続き吉田理事長が基調講演したほか、パネルディスカッションも行われた。最終日の5日は参加者による意見交換会を開くほか、山形市の山形学院高を視察する予定。

平成27年6月23日
全私学新聞



山形市で開かれた私学経営研修会の開会式で
あいさつする吉田晋・日私教研理事長

日私教研 私学経営研修会を開催

私学振興助成法40周年に合わせ

私学振興と教育の未来マテ

一般財団法人日本私学
教育研究所（吉田晋理事
長、中川武夫所長）は6
月4・5の両日、山形市
内のホテルで平成27年度
私学経営研修会を開催し
た。山形県、山形市、山
形県私立中学高等学校協
会（石原弘迪会長）等が
後援。「私学振興と教育
の未来」私立学校振興助
成法40年 新時代の経営
を迎える「私立学校振興
助成法」は、昭和47年10
月、同県米沢市で開かれ
た「全国私立中学高等学
校の校長ら約170
人が参加した。

校理事長・校長研修会」
での討議が同法制定へ私
学関係者の思いを高める
きっかけになったといわ
れている。そのため40周
年の節目に私学助成制度
の意義と今後の在り方を
再考し、今後の私学振興
に繋げるのがねらい。

開会式には全国で第3
位の私学助成水準（全日
制高校生一人当たり単
価平成25、26年度）を誇
る山形県の吉村美栄子知
事も来賓として出席、ま
た参加希望者が定員を大
きく上回ったこともあっ
て例年にも増して盛り上
がった研修会となった。

講演では、同研究所理事
長の吉田日本私立中学高
等学校連合会長が「教育
政策と私学振興」私学助
成制度を中心に「の演
題で、公職選挙法等改正
案や高大接続改革等の教
育改革の最新情勢を説
明、また私学振興に関し
ては、現在、支援策がな
い私立義務教育学校生へ
の修学支援措置の創設の
必要性を力説した。

続いて實吉幹夫・同研
究所副理事長・日本私立
中学高等学校連合会教育
制度委員長は「教育改革
と私学振興への思い」私
立学校振興助成法制定の
精神に立ち返って」の
演題で報告を行い、47年
の米沢市での研修会に出
席した西岡武夫・自由民
主党文教部会長（当時）
の発言がきっかけとなっ
て私学関係者の結束が一
段と強くなったこと、私
学人の先達の苦勞があっ
て法制化に漕ぎ着けたこ
と、中央に任せきりに
せず裾野の広い私学振興

活動が必要なこと、憲法
改正では89条（公の財産
の支出又は利用の制限）
が議論される可能性もあ
ることなどを報告した。

さらに地元・山形県の
椎名憲次・学事文書課長
が「山形県の私学の現状
と課題」と題して報告、全
国第3位の私学助成は、
知事や超党派の私学振興
議員連盟の理解の賜物だ
と語り、今後も私学なら
ではの独自性、知恵等で
時代を切り開く教育や若
者の県内定着促進に大き
な期待感を表明した。研
修会ではそのほか基調講
演、中川所長の報告「新
たな時代の教育と教員の
使命」、パネルディスカッ
ション、遠藤利明・自民
党教育再生実行本部長も
出席しての教育懇談会、
分科会討議、学校視察等
が行われた。（後日詳報）

